

防災仲間——新たなコミュニティの可能性

編集部

他人事ではいられない これからの水害

「これほどいろいろ取り組んでも後追いになることが多く、
忸怩たる思いがあります」

総論にご登場いただいた小池俊雄さんが発したこの言葉に、
目が覚める思いがした。水害を
なくそうと研究に取り組み人材
を育てつつ、今すぐ実行すべき
事柄や社会資本の整備のあり方
を政府に提言するなど真剣に取
り組んでいる方の言葉を聞いて、
自分はどこまで真剣に水害につ
いて考えていただろうかと思っ
かしくなった。

戦後しばらくの間、自然災害
が相次いだ日本は、国土整備に
投資して被害をある程度抑える
ことに成功する。しかし、近年
その様相が変わった。大規模な
水害が毎年のように発生してい
るのは周知の事実。特に平成27
年9月関東・東北豪雨で発生し
た鬼怒川の堤防決壊については、
小池俊雄さんだけでなく下館河
川事務所の青山貞雄さんもショ
ックを受けたと語る。治水や水
防災に携わる人々は皆、きつと
同じ思いだ。
非常に強い雨が地域を選ばず

降るようになった気候の変化に
加えて、1970年代半ばから
犠牲者が1000人を超えるよ
うな水害がなかった日本。国や
行政の努力によって私たちは守
られたがゆえに、かつてはあつ
たはずの水害への危機意識がい
つの間にかゆるんでしまってい
たのではないか。

国の機関も自治体も研究者も
私たち市民を守ろうと一生懸命
取り組んでいる。任せっきりの
時代はもう終わりだ。

自分が住む地域を 知ることが第一歩

水害を含む防災全体について
お話しいただいた林春男さんは、
「自助7割、共助2割、公助1
割」と言った。自助とは、他人
の力を借りることなく、自分の
力で切り抜けること。それがい
かに大切かは、大規模な土石流
が発生したにもかかわらず怪我
人すら出なかった山川河内地区
に見ることがができる。

「念仏講まんじゅう」で伝えつ
づけた江戸期の災害の記憶が、
土石流は必ずまた来ると住民に
植えつけた。暗闇のなか、個々
が自らの判断で逃げた行動は
「自分の身は自分で守る」とい

う防災の基本を示す。

しかし、「念仏講まんじゅう」
のような取り組みはまねしよう
としてできるものではない。し
かも悲しいことに、災害の記憶
は何もしなければ時間とともに
薄らいでしまう。

「自分の住む地区に目を向ける
ことが大切です」と説くのは、
山川河内地区にご同行いただい
た長崎大学名誉教授の高橋和雄
さんだ。長崎大水害から30年後
の2012年、長崎市内で地区
の防災マップを住民につくって
もらったところ、「やっぱりここ
が危ないね」と危機意識が一气
に高まったそうだ。

高橋さんは、水害の記憶をつ
なぐため、水害の碑や案内板に
二次元コードを取りつける試み
を進めている。

「かつてそこにどんな水害が起
きたのかを、二次元コードから
アクセスして見られるようにし
ます。どれほどの水が来るのか、
近くの避難所はどこかなどの情
報も盛り込む予定です」

ICT技術で風化を食い止め
る取り組みは大事だ。そして、
一度も水害が起きていない地域
にどうアプローチするかという
課題もある。洪水浸水想定区域

にしたがつてつくられるハザード
マップの見直しが進んでいる
が、個人に浸透させなくては意
味がない。防災学習用ARアプリ
「天サイ！まなぶくん」(p
20)や防災学習教材セット「逃
げキッド」(p39)といったツ
ルも応用したい。

頼もしい人たちに思う 自助発の共同体

私の家は高台にあるから水害
は大丈夫、関係ないよ——そう
思う人がいるかもしれない。し
かし、例えば自分が住む家のす
ぐそばの低地で水害が起きたら
ほんとうに無関心でいられるだ
ろうか。「あのおばあさんはどう
しているだろう」「自分にもでき
ることがないか」と気になるの
ではないか。

今回の取材で印象深かったの
は、お会いした方々が皆、前向
きで明るく、頼もしいことだっ
た。それはなぜか。「自分ででき
ることが多い人たち」だからだ
ろう。

例えば、掛保川に設置された
豊堤を初めて活用した正條自治
会の方々。西日本豪雨の後、市
役所が地区内に豊の倉庫を設置
したが、「これじゃあ豊が腐って

しまう」と自分たちで電気工事
を行ない、換気扇と夜間作業を
想定して照明を取り付けたのだ。
「頼ってばかりじゃいられない
よ。自分たちでやらなきゃね」
と笑う。

コミュニティで大切なのは一
芸に秀でた人がたくさん集まり、
つながることだと聞く。ごはん
をつくる、なにかを修繕する、
子どもたちの世話をする。いざ
というときは、地域の外側にパ
イプをもつ人も必要だ。

なんでもよいから得意なこと
を持ち寄って、多様な人同士が
つながること。かつて地縁をベ
ースにしたコミュニティがあつ
たが、都市部でそれを目指すの
は難しい。しかし、水害をはじ
めとする自然災害に備えて自分
ができることを持ち寄って「防
災仲間」としてつながれば、今
から都市部でも新しいコミュニ
ティをつくることができるので
はないか。

目指すべきところは、今の個
人主義をベースにしつつ、自助
から互助、そして共助へとつな
がるようなコミュニティ——。
それが地域の防災力を強め、ひ
いては他者に開かれた日本社会
のレジリエンスに結びつく。